

四〇〇万企業が哭いている

ドキュメント 検察が会社を踏み潰した日
石塚健司著 (講談社・1575円)



評・高杉良

(作家)

小泉・竹中ラインが推進した、大手金融機関に対する「厳格な資産査定」ならぬ「不適切な資産査定」の実行部隊である金融庁を、私は折あるごとに「金融検査庁」と指弾し、金融検査マニュアルの遵守が、日本の中小企業に壊滅的なダメージを与えてきた事実をも指摘してきた。

本書は、本物の検察庁が我が国の経済を根こそぎ破壊している真実を知らしめる迫真のドキュメンタリーである。そこには国家権力の前に絶望の淵に追い込まれた中小企業経営者、朝倉亭の悲惨な姿がリアルに描かれている。また中小企業を支援する使命を放棄したメガバンクに失望し、支援するためにコンサルタント業を立ち上げた佐藤真言の悲劇的な結末が説得力のある筆致で描出されている。会社組織で99%を占める中小企業は、日本経済を根本から下支えする大切な存在だ。

新・頭脳の科学 アタマとココロの謎を解



アタマを鍛える方法は数多く紹介されているが、肝心の人間の頭脳の理解が不十分なままで望んだ効果も期待できない。本書では動物の脳から質的に大発展を遂げた人間の頭脳とはいかなるものかを解明している。人間と他の動物との決定的な

異なる点にある。それが可能となった謎を探るには少なくとも生命の歴史上、脳なるものが誕生した魚類段階からの発展をみていく必要がある。そこから脳の一大機能としての「像の形成」が初めて解き明かされ、現代の脳研究の基盤である「大脳局在論」が根底から論破されていく。従来「脳科学」とは次元の異なる切り口で、頭脳活動を見事に示された根本的指針が示された書だ。(現代社・各1995円)

日本経済の病巣の核心に迫る

著者がエールを送ってやまない佐藤と朝倉は、必死にもがきながら築き上げてきた小さなやかな生活基盤を権力によって瞬く間に喪失させられてしまう。検察に「粉飾決算で銀行を欺いた」「震災復興資金を騙し取った」と摘発されたからだ。

東京地裁は佐藤と朝倉に2年4カ月の実刑判決を下した。だが、佐藤は弁護士を自指し、勉学に励む。また、朝倉も過酷な試練を乗り越えて、第二の人生を模索しようとする。と前向きに考えるのがせめてもの救いである。

昭和50年代に金融庁が存在したとしたら、現在の東京デイズニールランドはなかったろう。浦安の埋め立て地に遊園地を造るために、1千億円を超える資金を金融庁が是認する筈がないからだ。

夢の実現に銀行が黒子として貢献する…。そんな銀行の輝ける時代を描いた拙著『小説日本興業銀行』を読んでバンカーを志したが、メガバンクの現実に失望し、中小企業を支援するために奮闘した男を、検察は「震災詐欺」の罪で逮捕し、立件したのだ。マスコミも権力におもねるべく、検証せずに報道した。本書はデフレ不況から脱出できず、漂流する日本経済の病巣の核心に迫る問題作だ。

時評 論 高

おきたい 知ってほしい なら名家の 日本人と家紋

家紋は古来、貴族が白ち物と他人の持ち物を区ためにデザインし、武家の働きをアピールするたうして発達してきたが、日本はほぼすべての紋がある。西洋には家のとしての紋はあるが、王族



たしかに政治家は「国民のみなさま」、マスコミ人は「視聴者のみなさま」、医療関係者は「患者さま」といういい方をよくする。もともと商人が探み手で客に作り笑いを送るような気持ち悪さがそこにはあるはずなのだが、最早、だれもがそれを不自然には思わない。

竹内洋「『国民のみなさま』とは誰か(中央公論)は、不自然さを感じなくなった」の中に、戦後社会の変質を見定めようとする。竹内は、産業化と普通選挙によって生まれた大正時代以来の日本の大衆社会が経験した、2つの構造転換について述べる。構造転換Iは、村上泰亮が述べる「新中間大衆」が生まれた時期(1970年代)に当たる。新中間大衆とは「上下意識をもたず、エリートに追随するわけでもなく」、「現在中心・情緒指向・余暇指向・私生活指向」の「即時的価値」が顕著で、オルテガのいう「大衆人」にほぼ等しい。構造転換Iによって日本はそれまでの庶民の大衆から大衆の大衆へと、そして間歌の大衆社会から初めて恒常的大衆社会へと移行した。

構造転換IIは現在進行中だ。大衆圧力は今や高圧釜状態であるが、それは実態としての恒常的大衆社会(大衆の政治参加や社会参

大衆社会の2つの構造転換